「底が突き抜けた」時代の歩き方 479

香田証生さんはどうして解放されなかったのか

ここでも小泉首相の言葉が頻繁に登場することになるので、冒頭で前から少し気になっていたことについて書きとめておく。彼については、「小泉内閣の人気が意味するもの ――〈ひとり〉の強さ」と題する通信（０１年６月１９日記）で、次のような評価を行っている。《小泉首相は政治が言葉であり、その言葉に信が置かれるためには、自分が考えて決断を下す責任ある言葉でなければならないことを熟知していると思われる。つまり、小泉首相は自分の言葉を持つ人だったのである。これまでの政治家に自分の言葉は不要であったし、自分の言葉を持つことはむしろ邪魔ですらあった。それは、日本の社会で生きていくのに、自分の言葉を持たないほうが好都合であるのと同様であった。もちろん、自分で考えて自分の言葉で語るからといって、その中身が常に公正とは限らないし、小泉首相の靖国神社参拝や集団自衛権問題がそうであるかもしれないように、修整を余儀なくされることも起こってくるだろう。しかし、自分で考えることができる人は自分の考えの修整に対しても果敢であろうから、他の異なる考えとの交わりのなかで新たな考えが生みだされていく余地が育まれるにちがいない。

養老氏のいう個とは、〈ひとり〉ということである。日本の社会に「個人の意見がない」のは、〝〈ひとり〉の意見がない〟ということだ。我々の社会にないのは〝公としての〈ひとり〉〟であり、〈ひとり〉がなければ〈ひとり〉としてのつながりもない。養老氏の「個の公化」といういいかたは、開かれた〈ひとり〉としてのつながりにほかならない。養老氏は小泉内閣の高支持率のなかに、あらゆる夾雑物を取り除いて〈ひとり〉としての公の立場、あるいは公のなかの〈ひとり〉の立場を覗き込んだのである。もしそれが覗き込まれなければ、日本人の９割近い高支持率はそれこそ、相変わらずのワイドショー的人気の空騒ぎにしかすぎなくなるではないかというように。》

小泉首相の登場を新種の政治家の登場として期待していたけれども、時間が経つにつれて新種でもなんでもなく、単なる質のよくない変わり種にすぎなかったということである。小泉首相もまた、歴代のトップと同様に「自分の言葉を持つ人」ではなかった。私の見込み違いであった。自分で考えて自分の言葉で語っているように当初はみえたが、彼のワンフレーズ・ポリティクスはそれが振りでしかないことを白日の下に晒した。彼のワンフレーズ・ポリティクスのあまりの歯切れのよさ、勢いにごまかされてしまったとしかいいようがない。それほど彼はこれまでのトップにはない変わり種だったのだ。みかけの変わり種に過剰な変化を期待しすぎてしまったのである。したがって、《自分で考えることができる人は自分の考えの修整に対しても果敢であろうから、他の異なる考え

との交わりのなかで新たな考えが生みだされていく余地が育まれるにちがいない》という指摘は、彼に関してはもはやありえないことだと断言しなければならない。

小泉首相が当初からそのような人物であったのかどうかはわからない。彼は首相になることによって、歴代のトップと同様に、《自分の言葉を持たないほうが好都合である》ことを覚ったのかどうかもわからない。ただはっきりしていることは、無能そうで鈍重な森前内閣にうんざりしていた日本国民は私も含めて、さっそうと登場したようにみえる彼が「自民党をぶっつぶす」と叫んだ一言にしびれてしまったということだ。そこから過剰な期待が日本国民の間に生まれた。私もその一人である。その期待を膨らませて先の通信を書いたが、通信の中の小泉首相は実在する小泉首相とは異なり、どこにも存在しない夢の小泉首相である。現実の小泉首相は通信の中の夢の小泉首相からますます離反していくけれども、夢の小泉首相は《自分で考えて自分の言葉で語》らなくてはならない私たち一人一人にほかならない存在として、通信の外でこそ登場しなくてはならないだろう。

さて、香田証生さん（２４）について語ろう。彼の足取りを追うと、一人旅が趣味で昨年１月、ワーキングホリデーでニュージーランドに渡り、８月から９月上旬にかけて英語学校に通った。その後イスラエルの商業都市テルアビブに現れ、９月９日から今月１８日まで低料金のホテルにアルバイトをしながら宿泊した。彼はイラク帰りのフランス人宿泊客の話に関心を示していたという。１９日夕、ヨルダンの首都アンマンにある、イラクを目指す日本人の〝たまり場〟となっているクリフ・ホテルで、映画監督の四ノ宮浩（ドキュメンタリー映画『神の子たち』など）さんらと出会い、「この目で何が起きているのか見たい」とイラク入りの意思を打ち明ける彼に、周囲は「危険だからやめろ」と忠告したが、２０日夕、彼は夜行バスでイラクに向かった。

２１日午前１１時半ごろ、バグダッド・チグリス川西岸のバスターミナルに到着した彼は、軽装で長いズボンのすそをまくり、ホテルの場所を尋ね回る姿をバス会社の従業員らによって目撃されている。同日昼前、高級住宅街カンディル・ホテルで宿泊料が高すぎると断り、カサブランカ・ホテルの行き方を尋ねる彼は、「とても疲れた様子で、ズボンが汚れていた」（従業員の証言）。２２日、カサブランカ・ホテルで外国人であることを理由に宿泊を断られ、翌２３日昼前、再びバスターミナルに現れるが、この日はアンマン行きのバスはなく、そのまま人込みの中に消えた。ターミナルの事務所で「お金がない」と話していた彼の足取りは、日本政府の現地対策本部によって同日午前１１時４５分まで確認されている。２４日昼前にカサブランカ・ホテルに近いアガディール・ホテルでも同様に宿泊を断られている姿が最後に目撃されているが、その後消息は途絶えた。

２７日、黒装束の犯行グループに囲まれた彼は、４８時間以内に自衛隊がイラクから撤退しなければ香田を殺すと脅されているビデオメッセージの中に映しだされ、そこで髪を鷲掴みにされて、「すいませんでした、あと、また日本に戻りたいです」と低い調子で呟いた。１１月２日に武装グループ「イラクの聖戦・アルカイダ組織」がインターネット上に、香田さん殺害場面の映像が流される。『週刊ポスト』（１１．１９）と『週

刊現代』（１１．２０）の記事に基づいて、その場面を次に描写してみる。
　映像は約３分。そのうち２分あまりは、覆面を被り、足下まで黒ずくめの３人の男の前に、香田さんは縛られて座らされており、彼らが声明を読み上げるシーンである。床に敷かれた星条旗の上に座っている白いＴシャツ姿の香田さんはうつむいているために、その表情は読み取れない。
「日本政府が数百万ドルの身代金を出すと申し出たが、われわれは聖戦を遂行する」「日本が悲劇を避けたいのなら、自衛隊を撤退させる以外に方法はない」
　男たちは強い口調で、時に香田さんを指差しながら「声明文」を読み上げていく。最後に、「期限はすぎた。この異教徒の首を切断する」というと、中央の男は「声明文」が書かれたメモを持った手をだらりと下ろし、そこで数秒間の沈黙が流れた、その直後、怒声なのか、宗教的な祈りなのか、声を上げながら男たちは一斉に香田さんに襲いかかり横倒しにする。左側の男が意を決したように香田さんの頭に手を伸ばして髪の毛を摑み、中央の男は香田さんの左肩を両手で押さえ、そのまま左端の男の前に横倒しにする。やや遅れて右端の男が横になった足に両手を掛け、全体重を乗せて押さえ込む。次の瞬間、左端の男が大きなナイフを取り出し、片手で香田さんの髪の毛を強く摑んだまま、ためらうことなく銀色の光る刃を首筋に強く押し当てた。
　ナイフは信じられないほど抵抗なく香田さんの首にめり込んでいく。「あぁ」香田さんの口が、一瞬その形になったようにみえた。噴き出す大量の血。どす黒い赤で染まる星条旗……。生きたまま香田さんは首を切断され、その首は前のめりに倒れた首のない身体の上に載せられる。両手は後ろ手に縛られたままである。殺害シーンは途中で一部がカットされており、公開されたのは１５秒程度だった。画面が切り替わって、男たちは香田さんの髪を摑んで切断された首を高く掲げる ──。
　１０月３０日には遺体発見の誤報が流れたが、翌３１日に首を切断された香田さんの死体がバグダットの中心部に遺棄されているのが見つかった。この殺害映像については、先の『週刊ポスト』がこう報告している。《日本時間の１１月２日夜になって公開された香田さん殺害映像は、壮絶を極めたものだった。新聞やテレビが、その存在をほんの一言、報じるにとどめたのは、遺族への配慮というのが表向きの理由だろうが、実際には、あまりにも衝撃的な内容に報道をためらったことと、同じように激しい衝撃を受けた政府・外務省サイドから、報道を控えるよう各社に非公式の要請がなされたことが背景にあった。／しかし、そこにははっきりと、テロリストの残虐さ、そして激しい憎しみが込められていた。少なくとも、小泉首相と政府首脳たちには、それを直視し、イラクで何が起きているかを知る義務がある。》
　記事が辛口になっているのは、香田さん殺害が実行されていた頃、小泉首相と細田官房長官がそろって福田前官房長官の長男の結婚披露宴に出席して、シャンパンに酔っていただろうからだ。記事は不謹慎だと責めているわけではない。《一国のリーダーの果たすべき役割は膨大にあり、一方で果たせる責任には限界がある》と理解を寄せながら、

こう苦言を呈する。《ただし、小泉、細田両氏の政治家としての責任感と自覚を疑わざるを得ないのは、そのことを問われて答えた２人の言い方にある。
細田氏は、「長くお世話になっている福田さんに招待されれば、出席するのが礼儀です」といった。小泉氏は、「じゃァ、披露宴に出ないでじっとしていればいいんですかね？」と、国会答弁同様の逆ギレ、逆質問で切り捨てた。
そこには、自己弁護のほかに、質問をした記者に対する苛立ちが感じられるが、その先にある遺族や国民へのメッセージは見えない。
香田さんが政府の退避勧告を振り切ってイラクに入り、いわば予想された悲劇に見舞われたことで、自己責任を問われても仕方がないという世論が大勢だったことは事実だ。小泉氏の逆ギレが、それを見越して開き直った結果だとすれば、香田さんを襲った無惨な現実がどのようなものか、全く理解も想像もできていなかったことを露呈しているといっていい。》『週刊文春』（１１．１１）は、香田さん殺害という最悪の結果が官邸ではどのように受けとめられたのかについて、こう伝えている。
《ところが、星条旗に巻かれた惨殺死体で発見されるという悲痛な一報にもかかわらず、官邸内ではホッとした空気が流れていたという。官邸詰め記者が言う。
「悲壮感はありませんでした。未明に遺体が発見されると、昼頃には『いろいろありがとうございました』と挨拶があり、『遺体の搬送が今後の問題ですね』という呑気な言葉を残して、それぞれ帰宅していったのです」
実は、当初から諦めムードが漂っていたというのだ。
「事件発生後から、小泉首相は『救出に全力を尽くす』というセリフを意味もなく繰り返すばかり。しかし、政府は情報収集がまったくできず、最初からお手上げ状態。事件自体に迷惑顔をする有り様でした」（同前）
１０月３０日、小泉首相は福田康夫前官房長官の息子の結婚式に出席。その後、官邸に舞い戻った。
「公邸に帰らなかったのは、世論に気を遣ったパフォーマンス。そんな行動しかできない状態だったのです」（官邸関係者）》
更に、記事は４月の人質事件との状況の相違についてこう説明している。
「４月の事件は、激化したファルージャでの戦闘で、外国人に踏み込まれるのを嫌った自警団崩れが起こしたものと思われます。地元の人間が関与していたからこそ、彼らは聖職者や部族の呼びかけに応じた。
しかし、今回の犯行声明を出したザルカウィの組織は、ウラマー協会（聖職者協会）を思想的に敵視しており、協会側も幹部が米軍に摘発される事態で、積極的に仲介役の手を挙げることはありえないのです」（中東調査会・高岡豊）
《誘拐はビジネス化し、拉致された人質はテロリスト側に転売されることが多》く、「そもそもテロリスト組織には事務所などなく、また分裂や吸収を繰り返しています。人質が次々といろんな組織に手渡される例も多く、追っかけようがないのです」というジャ

ーナリストの勝又郁子の話を載せて、続ける。《テロリスト側の本当の目的は、軍隊の撤退などではなく、殺害ビデオを配信して知名度を上げ、勢力を誇示することが多い。４月以降、ザルカウィなどのテロネットワークに拉致された場合、生還する確率はゼロに等しい。香田さんの事件も、最初から殺すのが目的だった可能性がある。

しかし、香田さんの両親は同情どころか非難の声を浴びた。ちなみに、遺体の搬送費用は、５月に殺害された橋田信介さんの場合、遺族は、クウェートの日本大使館員から現地通貨で百万円以上の請求書をその場で手渡されている。

彼の行動を「無謀」と批判するのは簡単だが、今後も日本はテロが横行するイラク問題を抱え続けなければならない。》

香田さん人質事件の際も前回と同様に小泉首相は、「テロには屈しない。自衛隊は撤退させない」と、要求を突っぱねた。『週刊ポスト』（１１．１２）は記事のなかで、《ただし、日本政府の行動が正しかったかどうかは、それとは別に検証しなければならない。４月に最初の人質事件が起きた時、政府はマスコミに、《自作自演説》を流し、それが人質バッシングを呼んだ。濡れ衣だった。実は、今回も同じ過ちの寸前までいっていた》として、次の裏事情を明かす。

「現在、イラクに滞在している邦人はバクダッドに外務省職員が５人、マスコミ関係者が４～５人、それにＮＧＯの女性が１人いるくらいだ。外務省は邦人のイラク出入国を正確に把握できており、香田さん入国の情報は、その直後に得ていた。どうやって本人に退避勧告を伝えるか検討しているさなかの事件だった」（外務省筋）、「実は政府はその間、連絡方法を検討していただけでなく、香田さんの素性を探っていた。というのも、イラクには現在、ほぼ同じ年格好の青年がひとり滞在しており、この青年は共産党と関係が深いことがわかっている。政府部内では人質が香田さんか、その青年かを特定できず、青年だった場合は共産党が主張する自衛隊撤退を政府に迫るための自作自演の可能性があるとみていた」（政府関係者）という情報を列記して、記事はこうコメントする。《４月の人質事件でも、政府はまず自作自演を疑い、救出活動が出遅れた。解放まで９日間を要した。

これまでにわかったイラク入国の経緯を見れば、香田さんの行動は軽率すぎた。自己責任を厳しく問われても仕方ないだろう。しかし、日本人が拉致されたとの第一報に接し、テロリストの悪意より、まず自国民の悪意を疑うという政府・外務省の姿勢には疑問を感じざるを得ない。

事実、その後、時間を追うにしたがって、政府には焦りの色が広がった。

「その後の調べで、今回の人質事件を起こしたグループの何人かは、６月に韓国人青年を拉致し、首斬り映像を公開したメンバーと一致することがわかった。また、香田さんがただの旅行者であることもはっきりしたので、救出作戦を最優先に切り替えた」（同前・政府関係者）

そもそも政府の危険認識そのものが甘かったことをうかがわせる証言である。》

記事はまた、イラクの〝反日機運〟のあらわれとしていくつかの事件を取り上げる。１０月２２日午後、〈サマワの自衛隊員が地元テロリストに殺された〉という誤報が、日本国内に拠点を置くある国際機関に飛び込んで大騒ぎになった《数時間後、サマワの自衛隊宿営地にロケット弾が撃ち込まれる事件が起きている。土曜日に起きた新潟地震の影響で日本では大きく報じられなかったが、自衛隊がイラク入りしてから、宿営地に着弾したのはこれが初めてのことだ。それに続いて人質事件が起きた。国際機関が入手した情報は、イラクで同時多発的に「日本」と「日本人」に攻撃が仕掛けられることを予告したものとも読める。》自衛隊がサマワで現地住民が期待する地域経済の再生や雇用創出に何ら寄与していないことへの不満から、日本が費用を出して９月に完成したばかりの日本とイラクの友好記念碑が爆破された事件も起きている。

現在の自衛隊派遣のあり方に対して、「１０月はじめに来日したムサンナ州のハッサン知事は、表向きは自衛隊に感謝すると発言していたが、実際には復興事業にかなり文句をいったようだ。もっと雇用を増やすような事業をやれ、などと要求したというが、それは今の派遣規模、体制ではできるはずがない。政府は現地にすべて押し付けているが、サマワの人たちを満足させられないなら派遣の基本計画を見直すべきだし、それができないなら撤退する選択肢もある」と疑問を投げかける、元航空自衛隊三佐で聖学院大学講師の潮匡人の発言も紹介しているが、自衛隊派遣が日米同盟のシンボル的な意味しか持たないことの付けがイラクの現実から押し寄せており、役に立たない自衛隊派遣が実質的に米軍の占領政策の一環にほかならないという評価がイラクで定まることが、日本人人質事件にも大きな影響を及ぼしているということだろう。

『週刊現代』（１１．１３）も、《日本政府はあまりにも、死に直面した自国民に対し、冷酷だった。いや、首相官邸の動きを見ると、そもそも香田さんを助けようとする意志があったのかどうかさえ疑わしい》として、小泉首相の動きを追っている。

《１０月２７日午前６時。小泉首相は台風２３号の被災地である兵庫県豊岡市を視察するため首相公邸を出発した。その１０分後、羽田空港に向かう車中でロイター電が邦人拘束事件の第一報を流したことを知る。しかし、小泉首相は引き返そうとしなかった。民主党の岡田克也代表が、新潟県中越地震の現場にいち早く向かったことに焦り、豊岡市の視察に拘（こだわ）ったのだ。

第一報を受けてから１０分後、小泉首相は細田博之官房長官に、

「事実確認を急げ。事実なら救出に全力を尽くせ。自衛隊はイラクから撤退しない」

と命じた。事件後、小泉首相から出された指示の中で、この言葉以上に具体的なものはない。

第一報から２０分以内に飯島勲首相秘書官らスタッフが揃い、官邸は緊張感に包まれた。理由ははっきりしている。武装グループは拘束した日本人について、「自衛隊と働いていた日本人」と表現していた。

もし自衛隊関係者が拘束されていたら ── 。自衛隊の派遣期間を今年１２月１４日までとしている政府の基本計画について、延長を認めさせるのが難しくなる。それに、ア

メリカ大統領選を控え、ブッシュがいまのところ有利とはいえ、万が一ケリーが勝つことがあれば、対イラク政策が見直される。自衛隊の派遣に慎重だった勢力は、ここぞとばかりに小泉首相の失政について攻撃するだろうし、この事件も槍玉に挙げられる。

こうした政治上の思惑が交錯する中、官邸内の緊張感を消したのは、他でもない香田さんの身元、そして渡航の目的だったのである。

「自衛隊関係者ではないばかりか、ジャーナリストでも、ボランティアでもなく、ただの旅行者だと分かった瞬間、たしかに官邸の空気は緩んだ」（内閣危機管理室関係者）》

ボランティア活動家の高遠さんらやジャーナリストの安田さんらと異なって、《香田さんは外国で見聞を広めたいという理由でイラクに行った旅行者である。政府は香田さんのイラク入りに、ボランティアやジャーナリズムといった「大義」がないと踏んだ。それまでの緊張感は、香田さんへの怒りとなって噴出した。

「あれほどイラクに入るなと言っているのに、何で行くんだ！」（町村信孝外相）

「退避勧告が再三出ているのにもかかわらず、（香田さんのイラク入りは）理解しがたい」（細田官房長官）

小泉首相は前述した通り、第一報というほとんど情報もない段階で「自衛隊は撤退しない」＝「人質は見殺しだ」という態度を決めたほどである。細田官房長官もその日の午後には、こう言った。

「いずれ向こうから何らかのアピールがあるのではないか。それまで待つしかない」

日本の政府に、香田さんの味方は、誰一人いなかった。》

『週刊現代』のこの記事は、今井氏や安田氏のコメントを次のように掲載している。

《彼の行動の責任を問うことと、日本政府として香田さんを救出する義務とは切り離して考えるべきである。４月に拘束事件が起きたとき、日本中に「自己責任」の言葉が溢れ、人質になった人間に全責任を負わせるべく、政府が家庭環境まで調べ上げて情報を流したことを忘れてはならない。あのとき拘束された今井紀明さんは、語学留学先のイギリスで、このニュースに関する情報をインターネットで収集していた。

「掲示板サイトに『首をはねられちゃってください』などと書きこまれているのを読みました。なぜ救出されていないうちから誹謗中傷が溢れるんでしょう。怒りを感じます。僕たちが拘束されたときも、武装グループと僕たちがグルで『自作自演』だという中傷が、ネットどころか新聞にまで書かれました。

香田さんの行動は、報道を見る限り批判される部分もあるのかもしれません。でも救出の途中なのに、一個人の行動を公然と批判する政府の態度には違和感を感じます。拘束の経験のある僕は、この事件を正直つらく感じます」

同じく人質になったジャーナリストの安田純平さんも、政府の対応を批判する。

「今回の相手は、私たちを捕まえた人たちとは違い、簡単に人を殺しているグループです。だから発言の一つ一つがすごく影響するはずです。小泉首相は無神経にも『テロには屈しない』とか『テロリスト』という言葉を使いましたが、敢えてその言葉を使う必

要があったのでしょうか」
　４月の拘束事件の際、イスラム法学者教会とともに水面下で人質解放に尽力した「イスラミックセンター・ジャパン」のコタイバ・サマライ氏に話を聞いたが、政府が本腰を入れていない様子はここからも漏れ伝わってきた。
「センターの副会長に対して、法務省や警察から、非公式に、『そちらは、どう動いていますか』 という問い合わせがありましたが、正式な協力要請ではありません。韓国政府は韓国人が人質に取られた際、韓国がイスラムの友人であることを訴えるフィルムを作成して流すなど努力しました。なぜ日本政府はそうしないのでしょう。東京には立派なモスクがあり、神戸には１００年前からモスクができているということを、イラク国民に直接訴えるのです」》
　自衛隊に対する武装勢力の脅しがより過激になっていることにも言及しつつ、自衛隊のこんな内幕まで取り上げている。《いまサマワの自衛隊員には、密かにある指令が出されている。それは「もし誘拐、拘束されそうになったら、ためらわずに相手を撃て」というものである。「誘拐されてしまったら、香田さんと同じように自衛隊撤退の駆け引きの道具になる。しかも現役の自衛隊員であれば、その効果は高い。だから、相手か自分が死んでしまっても、銃撃戦に持ち込め。人質になるぐらいなら死んだほうがマシだという意味です」（軍事評論家・神浦元彰氏）》
　捕虜となったからには生きると思うな、死を選べという戦前の軍隊の戦陣訓が、戦後の自衛隊に見事に甦っているといえよう。４月の人質事件や今回の香田さんに対する政府のバッシングをみるかぎり、自衛隊員が人質になるという「失態」を犯すことになれば、当の自衛隊員はもちろんのこと、自衛隊までどんなに叩かれることになるか、は想像するまでもない。民間の人質ですら、「死ぬがいい」とか「首をはねられちゃってください」とかいわれるのであれば、人質になった自衛隊員がどうしておめおめと救出を待つことができるだろう。人質事件の頻発は暗黙のうちに自衛隊員に対して、「人質になるぐらいなら死んだほうがマシだ」という教訓を刷り込み、彼らを死地へとじわじわと追い込んでいたのである。《日本政府が、国民を守る国家ではないことははっきりした。香田さんだけでなく自衛隊員もまた、小泉首相にとって、政権運営に支障を来すか否かを測るコマに過ぎない》と、記事は締め括る。
　１０月２２日に初めて自衛隊宿営地にロケット弾が撃ち込まれたその１０数時間後に、香田さんがバグダッドで拉致され、一週間後の１０月３１日、再び宿営地にロケット弾が撃ち込まれ、今度はコンテナを貫く威力をみせつけている。自衛隊への不満をあらわす反日感情の激化がその一連の経過に垣間見られるが、それでも「サマワは戦闘地域ではない」「自衛隊は現地で歓迎されている」と繰り返す政府の姿勢に対して、『週刊ポスト』（１１．１９）はこういう。
《サマワの情勢に詳しい米軍関係者は自衛隊の危うい状態を警告する。
「日本では、人質事件が新潟地震と重なったことと、一部の政府寄りのメディアが、事

件は無謀な行動を取った被害者の責任であるという論調で報じたため、われわれの想像よりはるかに日本国民の動揺は小さかった。が、このままでは日本も自衛隊も危ない。サマワの経済は破綻寸前で、失業者が急増して暴動が起きかねない。オランダ軍は、それを懸念して数か月以内に撤退する方針を示しており、そうなれば自衛隊は丸腰同然になる。アルカイダがこの時期に日本人を殺害したのは偶然ではない。サマワの社会不安が高まり、オランダ軍の庇護がなくなることで、今なら自衛隊を叩ける、日本政府を逡巡させることができると計算しての犯行だろう。映像では、殺害は星条旗の上で行なわれている（発見された遺体は、その星条旗にくるまれていた)。日本を米国と同一と見なす、自衛隊を米軍の一部と見なすという明確なサインだ。小泉首相は国内では、自衛隊は人道支援のために派遣したといっているが、米政府には同盟軍として派遣していることを暗に認めている。アルカイダは、その二枚舌まで知って、小泉政権を追い込む戦略に走り始めたとも考えられる」

香田さん拉致の直後、小泉首相が「テロには屈しない。自衛隊は撤退させない」とコメントした様子を見た防衛庁幹部は眉をしかめた。

「あれではテロリストを挑発しているようなものだ。本来なら、自衛隊が人道支援をしていることを訴え、一方で無辜（むこ）の民間人を殺すことを非難するコメントをすべきだった。人質事件と自衛隊派遣を自分からリンクさせて語ったことで、完全にテロリストの術中にはまってしまった」

そして、自衛隊は危機のさなかにとり残された。》

二回目の宿営地砲撃が、《コンテナの鉄板を２枚貫き、さらに防御のために積まれた土嚢（どのう）まで貫通した》ことによって、テロリストが同じタイプのコンテナを居住スペースに使っている《隊員の命を奪えることが証明された。まして砲弾は信管が外されており、爆発はしていない。明らかな脅しであり、香田さん事件とあわせて、日本政府は警告にどう対処するか、一刻の猶予もない対応を迫られている。が、その動きはあまりにも遅い。》わずか６００人の隊員によるサマワの｀戦時配備｀にはあまりにも不足があり、政府は、「自衛官をイラクに送り出しただけで目的を果たしたと勘違いしている。そこから先は現場に丸投げするだけだ」という幹部自衛官の声も聞かれる中で、自衛隊こそが《日本政府がアメリカに対して差し出した「人質」》（西谷修）であることが、じわじわと浮かび上がってくる。記事はだから、こう警告する。

《砂漠の闇の中でロケット弾の照準を定めているテロリストの前で、丸腰同然でさらされている６００人の自衛官たちは、まるで日本政府の「人間の盾」ではないか。彼らが守るのが国民の生命や国益だというならまだしも、嘘に嘘を重ねて自衛隊派遣を押し通した小泉首相と政権幹部の政治的利益の盾にされるなら、それはシビリアン・コントロール（文民統制）の乱用というべきだ。

小泉首相は、テロリストの要求を突っぱねるパフォーマンスを演じているが、その実態は、香田さんの死が残した警告と、自衛隊の危機を無視しているにすぎない。》

人質問題の中に日本政府及び日本国民の「パフォーマンスの成熟度」のあまりもの低さを見出した斎藤美奈子ではないが、最初の人質事件に続く香田さん殺害事件でも、基本的には「自衛隊は撤退しない」「テロには屈しない」を、〝バカの一つ覚え〟のように繰り返している小泉首相をみていると、つくづく「能なし」という言葉が噴き出してくる。「パフォーマンスの成熟度」の低さどころの問題ではないような気がする。その二言はもう十分にわかったから、その上に気の利いたなにか、別の言葉を付け加えてくれ、最初の人質事件から一体なにを学習してきたのか、と思ってしまうが、最初もこの二言で国内を乗り切ったから、今度もこの二言でバッチシ、といった魂胆がミエミエなのである。国際日本文化研究センター助教授の池内恵も『文藝春秋』（０５．１）で、《深い議論がなされないまま、急速に忘却されようとしている》香田さん殺害事件は、４月の人質事件以上に、《より根本的な「国家安全保障」に関わる問題を浮き彫りにしている》として、やはりこう指摘する。

《当初から判明していた犯行グループの性質からして、単に「自衛隊撤退はしない」「テロには屈しない」とだけ繰り返すのは、恫喝を真っ向から受けて立ち「どうぞ、殺してください」と言ったに等しい。たとえどんな交渉術を用いたところで、おそらく今回に関しては人質は殺されただろう。しかし世界の注目が首相に集まるこの機会に、日本の立場をもっと雄弁に語るべきだった。

訴えるべきことというのはそんなに複雑な内容ではない。

「日本の自衛隊はイラク南東部のサマーワという小さな町で給水活動や病院・学校の補修などを行っている」「自衛隊は治安維持活動を行っておらず、一人のイラク人も殺傷していない」「日本には自衛隊派遣で石油権益を押さえる意図など全くない」「香田さんはまったくの民間人旅行者である」といった、ごく当たり前に感じられることである。また、「日本はアラブの発展と平和に多大な貢献をしてきた。なのに、テロの対象となるのは不当である」と強調し、「アラブ諸国がテロ活動を黙認するのであれば、今後は日本の援助は維持できない」といった点も示唆しておく必要があった。

日本から言えばこれらは当たり前すぎる事実なのかもしれないが、アラブ諸国の情報空間の中で流れる言説からすれば、かなり目新しい内容である。日本とアラブ諸国の間には大きな情報ギャップがあり、こういった当たり前に感じられることさえも、責任ある立場の人間がはっきり口に出して強く主張しないと届かないのである。》

《人質殺害を支持するのはイラクよりもむしろ周辺のアラブ諸国の世論である。今回の事件もイラクに侵入したアラブ諸国の出身者を主体としてなされたと見られるが、今後はイラク以外のアラブ諸国や、さらに世界各地（日本国内を含む）で邦人に危害が加えられる可能性がある。

この意味で、小泉首相の今回の事件に対する発言の最大の問題は、自衛隊撤退拒否という意味での「テロに屈しない」という話と、「対テロ戦争を続けていく」という話が連続し、混同して受け止められる点である。自衛隊派遣は、タテマエの上でも、実態と

しても、イラクで対テロ戦争に参加しているわけではない。自衛隊派遣と対テロ戦争が同一視されてしまえば、犯行グループの主張に根拠を与えてしまう。》

イラクの政治プロセスが進み、それに抵抗する活動も激化する中で、日本（人）の覚悟はますます問われてくるだろう。《これまでは「自衛隊は自衛隊を守れるのか」「自衛隊が死者を出したら、自衛隊は撤退か」という議論が主であったが、「日本人が何人殺されたら、自衛隊は撤退するのか」「そもそも日本は日本人を守れるのか」という、より困難な問題に直面することになる。》

「日本は日本人を守れるのか」つまり、日本は「日本人を守れる」国たりうるか、という根本的な問題が、香田さん殺害事件によって浮かび上がっている、ということだ。香田さん殺害というやりきれない事件から日本及び日本人がそう受けとめないとすれば、この事件は無謀な青年が仕出かした自業自得の枠に収まるしかないだろう。この視座がまったく欠落しているのが、『週刊ポスト』の連載エッセイ（０５．１．１・７）の中の曽野綾子である。

朝日新聞（０４．１１．４）の投書者が香田さん事件について、「小泉首相は今回も早い段階から『自衛隊は撤退しない。テロを許すことはできない』と言明した。一体誰に向けて発した言葉なのだろう。犯人側へのメッセージであるのは確かだが、ブッシュ米大統領にも向けた言葉なのではないかと私は思う」と書いていることに、彼女は《では日本の総理はどうすればよかったのか。「あなたの言うことを聞いて、兵を撤退します」と言えばよったのか。私はどちらかというとイラク派兵に最初から反対なのだが、それでも「撤退しない」という言葉は、当然であり、それは今や国際社会全体の譲れない理念である》と反論し、首相の言葉は、「少なくとも、『また日本に戻りたいです』と力なく訴えた香田さんを励ます言葉ではない。救出への熱意があるなら、町村外相だけでなく首相自らも『香田さんは、自衛隊とも日本政府とも全く関係がない純粋な民間人』などと必死に呼びかけたはずだ」という投書者を、《香田さんが民間人であることをテロリストたちが知らず、知ればその立場を評価して態度を変えたかも知れない、と考えている》《基本的な甘さ》として退ける。

投書者の《いかにも人道主義的でかつ良識あるかのような匂いだけは残している》意図に文字通り対応する曽野氏にはだが、投書者の文章を超えたところでの日本人人質事件に対する根本的な把握が欠落している。いわゆる政府の「パフォーマンスの成熟度」という問題である。首相の代弁のような対応になっているから、「国家の安全は誰が守るのか」という投書者に、《首相の視線は世界全体の動きの中にあるのが当然であって、一人の無謀な行動の青年の救出だけを考えるものではない》などと、作家としては致命的な頓馬ぶりを曝けだしてしまうのだ。小泉首相の視線が《世界全体の動きの中にあるのが》感じられないし、《一人の無謀な行動の青年の救出》をも視野に収めないような、《世界全体の動き》に対する首相の視線であるなら、日本はどのようにして日本人を守れるというのだろう。　　２００５年5月１３日記